

令和2年度 本郷中学校
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含まれます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【二】 次の①～⑤の――線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 祖父は養蚕業を営んでいた。
- ② アばれる馬を手なずける。
- ③ タテ一列に並べる。
- ④ ネンリヨウを補給する。
- ⑤ 二人で隠れてミツダンする。

【二】 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、二〇〇二年に映画監督の大林宣彦（「ぼく」）が語った内容を、聞き手である坂上恭子が書き記した『あしたづくり 子供と共に考える、——楽しい不便、賢い我慢。』からのものです。それぞれを読んで、後の問いに答えなさい。

【文章Ⅰ】

ぼくの生れた尾道にも方言が沢山あった。その中でぼくの記憶に強く残っているのは、「みてた」という言葉だ。これは共通語に言い換えると「無くなった」という意味である。

ぼくが子供の頃、母親がお醤油の瓶から、おかずにお醤油を一滴、一滴、滴らせて、最後の一滴を使い終えたとき、「ああ、お醤油がみてたね」、と言った。当時はいまのように食卓の上にお醤油が小瓶で出されることは無く、お醤油は大きな五合瓶や一升瓶のまままで台所に置いてあるものだった。

ぼくはその頃、漢字のお勉強をしていたので、

「お母ちゃん、『みてた』ってどういう字を書くの?」、

と聞いた。すると母は、

「それは、この土地に住む私たちだけが使っている言葉だから、漢字ってあるのかな。でも人間が使ってきた言葉だから、きっとある筈ね」、

と暫く考えてからこう言った。

「海の潮の満ち引きの『満ちる』という字を書いて、『満てた』と言うのかしら」。

尾道という町は、動物の尾つぽのように細長い町である。山の尾根からすぐ海が繋がっていて、その山の中腹の傾斜地に、いまにも滑り落ちそうに町がある。坂の下はすぐ瀬戸内海。この海は普段でも三〜四メートル程の干満の差があつて、大潮の日になると、干満の差が五メートルにも六メートルにもなる。その潮の満ち干の激しい海のお陰で、例えば塩を作る智慧や文化が生

れた。砂浜にピラミッドのような三角錐すうすいの砂を積み、その砂に潮が満ち、そして干潮になった後で、砂の中に残った塩を採る。ぼくの大好きな塩のおむすびも、瀬戸内海という海の満ち干のお陰なのだ。

更に言えば、尾道という小さな町が日本の重要な港町として九州や北海道を結んだり、A 太平洋と日本海を結んだり、遠く外国注2と結ばれたりしているのも、この海のお陰である。古くは九州の方から満ち潮に乗ってやって来た船が、ちょうど尾道のあたりで潮待ちをして、今度は引き潮に乗って、また大阪や江戸の方に行く。潮の満ち干のお陰で尾道は海路が発達して、豊かな港町になることが出来た。

B その素晴らしい港も、いざ船がこの港に停まろうとすると、干満の差が大きいため、どこの海岸に停めてよいのか分らない。程よき潮になるまで待たなければならぬから、時間もかかるし、我慢も必要だ。そこで先人たちは智慧を働かせて、陸から海に向って石段を造った。この石段さえあれば、満潮だろうと干潮であろうと、船はいつでもどこにでも停まる事が出来る。これは、恵みが多いけれども、不便や我慢をも強いられる海と共に人間が暮らすための智慧である。

また、この石段は「雁木」と呼ばれる。空を渡る雁の群れのように、石段がギザギザになっていることからこの名が付いたという。雁が木の枝で羽を休めるように、旅をしてきた船がこの港で安心して休むことが出来るという意味もこめられているようだ。

これらはみんな母親がぼくに教えてくれたことだ。

「おじいちゃんやおばあちゃんや、お父さんやお母さんが、あなたに『宣彦』という素晴らしい名前を付けたように、私たちの先祖はこの尾道の石積みに『雁木』という美しい名前を付けたのね」。

母親は、暮しと言葉とが結び付いていることを教え、「みてた」という言葉が持つ物語を伝えてくれた。けれども、子供というものは簡単には納得しない。

「お母ちゃん、でも変だよ、その話。だって、お醤油が無くなったんですよ。無くなったんだから、『満てた』じゃなくて『引いた』じゃないの?」。

理屈ではそうである。だが母はちよつと厳しい顔でぼくを見てから、こう言った。

「たしかにあなたが言うとおりね。でも、あなたの考え方はお母さんはちよつとおかしいと思いますよ。あなたの答えには思いやりがありません。では今度は目を閉じて考えてみましょう。あなたも目を閉じてごらんさい」。

ふたりで目を閉じて考えた。

「はい、お母さんには分りました。あなたは、目に見えるお醤油だけを見ているから、お醤油が無くなれば『満てた』じゃなくて『引いた』だと思ったのでしょうね。たしかにお醤油は無くなったけれども、私たちがひと月もふた月も、いいえ、半年近くもこの瓶から一滴一滴お醤油をいただいでご飯を美味しく食べ、健康な体をいただいで、家族団欒、皆で楽しく幸せに生きてきました。そのお醤油さん、ありがとうという気持ち、いまこの瓶の中に満ちて、いっぱいになっているのよ。だからこれは、ありがとう、がいっぱい満ちてる瓶。単なる空き瓶でもないし、ゴミでもない。ですから、これをきれいに洗って、またこの瓶にお醤油をいっぱい満たして、お醤油さんありがとうと言いなから、これからもお醤油を大切に無駄なく一滴、一滴使っていくましようね」。

当時、母はまだ二十八、九だったと思う。ひとりの若い母親の言葉がこのような物語を紡ぎ出す力となるというのが、当時の暮しの中の文化だったのだと思う。

ぼくたちは二十一世紀を迎え、現代の子供たちに、「そのうち地球上にエネルギーが無くなるぞ。」 C 省エネをしなさい。

そのうち地球上はゴミだらけになるぞ。 C ゴミを出すのはやめましょう」と言っている。資源の問題、ゴミ問題、リサイクルの問題を、いささかヒステリックに声高に叫んでいる現代の親と比べると、あの時代の親はなんと穏やかにものを考え、ぼくら子供を深く諭してくれたのだろう。お醤油の空き瓶の中には「ありがとう」という心がいっぱい詰まっているという暮しの中から生れた智慧でもって、省エネの問題もゴミ問題もリサイクルの問題も上手に語ってくれた。

ものやお金の面では貧しかったかもしれないけれど、心が豊かだった時代の物語だと思う。

【文章Ⅱ】

ぼくたちは、言葉が本来伝える意味を、あるいは感情を、更に言えばその心をおろそかにして、言葉を単なる情報にした。共通語は情報言葉で、方言は物語言葉である。そして共通語は文明の言葉、方言は文化の言葉だと言える。

二十世紀は文明の世紀であり、文明に伴う消費経済の世紀でもあった。その中でぼくたちは、文化というものを敢えて捨ててきた。それがぼくたちの現代である。

現代の言葉の乱れも、そこに原因がある。言葉というものは本来、目には見えない、情報にはならない心の模様、願いや思いを、より正しく分りやすく伝えるためにある。だからこそ方言もその地方独自の暮しの中で、ひとの思いや願いを伝えるのに役立つのだ。伝えたいものが無くなり、皆が目を開いてばかりいると、目を閉じてこそ見えるものが無くなり、言葉が必要では無くなる。言葉が本来持つものを伝えるという機能がどんどん失われるため、言葉が乱れていく。

更に言えば、目で見るだけなら誰の目にも同じように映るものでも、それぞれ夫々のひとの心にはさまざま様様な違ったものが見える。同じものを見ていても、百人百通りの風景があり、決して横並びにはならない。しかし、皆が勝手にバラバラの言葉を語り合ったら伝達の効率は悪くなるし、高度経済成長も文明化も為し遂げられない。文明も経済も、皆が横並びになつてはじめて生れるものだからだ。

横並びからはずれたことを言うのは恥ずかしかったり、落ちこぼれてしまうことだったりするので、³言葉が持つ本来の必要性は無くなってしまった。人類が言葉を失ってしまうと、それは滅亡に繋がる。

人間は裸のサルであるともいう。裸のサルである人類が、弱肉強食の世界にいきなり放り出されたら、きつとすぐに滅亡していた筈だ。ぼくたち人類は尖つた牙も、鋭く伸びた爪も、厚い毛皮も持っていない。神様は人類にそういうものを与えない代りに、言葉を与えてくださった。お互いがお互いの本能や遺伝子を言語化して語り合うことで、ひとつの社会を作るようにされた。それによって人類は、弱肉強食の世界の中で、他の生命と共存共生する力を持つことが出来たのだ。

人類の文明や経済力というものは、例えば、尖った牙や鋭い爪や厚い毛皮のようなものだったわけだ。動物の毛皮は、一年に

一回生え変わる。牙や爪は伸びすぎると、動物は木や石にこすりつけてすり減らす。牙も爪も毛皮も、伸びすぎたり生えすぎたりすると、かえって減びてしまうからだ。

一方で人間の考える力は、どんどん伸び続ける。だから科学もどんどん進む。でも昔から、ゆきすぎた科学は人類を滅ぼすと
言われる。だから人間は、伸びすぎた、ゆきすぎたものをすり減らしていく力を持たなければいけない。

人間が言語によって考える力を持っていることは、そのすり減らす作業に使いなさいという神様の教えでもある。これはゆきすぎだよ、もっと抑えようよという、抑止力である。抑止力を持たなくなったら、人類は滅びてしまうのだ。⁴

二十世紀は、人類は考える力を使って、羽も無いのに鳥を真似て空を飛べるようになった時代だ。しかも鳥が行くことも出来ない、月にまで飛んで行ってしまった。鳥を真似て、鳥を超えてしまった。これが文明と呼ばれるものである。鳥より偉いぞと思
い人類は驕おごってしまった。あとはゆきすぎて滅びるしなくなってしまう。

鳥には飛ぶ以外にもうひとつ力がある。羽を休める力だ。太平洋の荒波の真ん中でも、あるいはスイスの溪谷の強い風の中
も、渡り鳥たちは羽を休める力を持っている。羽を休めるとき、彼らの中にある遺伝子が、ここまで飛ぶ力を与えてくれた
先祖たちに対して感謝をし、一緒に飛んで来た仲間たちと友情や絆きずなを作り、未知の世界に向って、また飛び立っていく勇気を持
つ。彼らは言葉を持たないけれど、彼ら自身が持っている能力の中で種の保存、繁栄の務めはたを果している。

人間はいま空を飛び、それ故ゆえに進歩したつもりでいるが、なかなかそうそう休もうとは考えない。二十世紀の人類は、飛びす
ぎた鳥だったのだ。だからもう、絶滅しかけていられるのかもしれない。⁵いまぼくたちに大事なことは、羽を休める力を鳥から学ぶ
ことだ。

飛ぶ力は文明の力だ。羽を休める力は、文化の力。人類には文化が大切なのだということに、思い至らなければいけない。

文明とはより新しく、より高く、より速く、より効率がよく、ぼくたちの手や足に代って、便利で快適な生活を作ってくれる
という、ありがたいものである。けれども文化は、文明とはまったく正反対の性格を持っていて、より古く、より深く、よりゆっ
くりとだから、効率は悪い。不便や我慢も沢山ある。でもそれを、智慧と工夫を働かせて乗り越えていくから、人間は賢くもな

るし、豊かにもなるし、幸福になるといって褒美も貰うことができる。

どうやら二十世紀のぼくたちは、文明の方にばかり目を向けていたようだ。目に見えるものばかりに目を向けていたので、飛びすぎて絶滅しかけている。だったら、これからは少し目を閉じて羽を休め、自分の心の中にある遺伝子が呼び掛ける声に耳を傾けたらどうだろうか。それは過去を知り、いまを生きることだ。いまを生き、更に明日を作る子供たちと、共に手を携えて、一歩を踏み出さなければならない。

ぼくたち大人も、子供も、二十一世紀を生きていく中で、自分たち人間の言葉を、どう捉え直すかということから始めなければならぬのではないだろうか。

注1 方言……共通語・標準語とは異なつた形で、特定の地域だけで使われる言語体系のこと。なお、この場合、社会階層や民族の違いなどによつて異なる言語を指しているわけではない。

注2 国……「国」と同じ。

注3 省エネ……「省エネルギー」の略。限られたエネルギー資源を効率よく使うこと。

問一 A C にあてはまる言葉を次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。なお、 C には同

じものが入ります。

- ア でも
- イ かつて
- ウ もし
- エ あるいは
- オ だから
- カ なぜなら

問二 〰️線ア～エのうち、言葉の働きとして性質の違うものが一つあります。それはどれですか。記号で答えなさい。

問三 〰️線1「尾道」について、問題文中での説明としてふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この町は瀬戸内海に面して細長く展開しており、山間部の斜面地に位置しているために坂が多い。
- イ この町は潮の満ち引きの差が激しく、それによる恩恵だけでなく不便さも感じる地域である。
- ウ この町は瀬戸内海の潮流の状況に合わせて運航する船が頻繁に寄港するため、港町として発展した。
- エ この町は停泊する船のために石段を設けることで利便性が高まり、その結果海路の発達に役立った。

問四 〰️線2「暮しと言葉とが結び付いていること」とありますが、この時の「母親」は「ぼく」にどのような内容を伝えなかったと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 瀬戸内海ならではの潮の満ち引きが尾道の人々の暮らしと深い関わりがあったことから、醤油が無くなった状態を「満てた」という言葉で表現したということ。

イ 「みてた」という言葉が海の潮の満ち引きと関連しているように、「宣彦」という名前もこの海辺の町に住む人々の生活の影響を受けたものであるということ。

ウ 「雁木」という名前は雁の群れのかたちを連想して付けられたことから、現代人の生活と比較して、昔の人々の方がもっと動物と身近な存在であったということ。

エ 「雁木」も「宣彦」も名付け親が深い愛情を持って付けた名前のため、いつの時代でもこの言葉にまつわる美しい物語を語り継いでいくことができるということ。

問五

——線3「言葉が持つ本来の必要性」とありますが、これはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本来受け取る側次第で変化するはずの情報を、人々が一律に同じ内容で捉えられるようにうながすことで、他の生物の命と引き換えに人類の発展を実現させるためのもの。

イ 人間が固有の思いや願いをお互いに伝え合うことで、効率的な情報交換を可能とする社会を実現し、その結果、滅亡を回避できるような方向に人類をうながすためのもの。

ウ 一つの物事を同じものとして単純化するのではなく、人間がそれぞれ抱えている本心や本音をなるべく正確に意思伝達し合い、お互いに心を通じ合わせるためのもの。

エ 尖った牙や鋭い爪を持たない人類が言葉を使って意見を交わし、爪や牙に対抗できる武器を生み出すことで、人間同士で共存共栄できる力を身に付けさせるためのもの。

問六

——線4「抑止力を減びてしまうのだ」とありますが、ここから分かる「ぼく」の考えとはどのようなものですか。それを説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類の考える力が生み出した科学は快適な生活をもたらしてくれたが、争ったり競ったりすることのない穏やかな世界に身を置いた結果、人類が退化してしまわないように対応策を考えるべきだ。

イ 人類は科学を発達させることで安全で豊かな日常生活を実現してきたが、発達させすぎてしまったりかえって人類に不利益を与えてしまう恐れがあるため、科学とは距離を置くように努めるべきだ。

ウ 人間が考える力を自在に用いたため、科学は勢いよく予想以上に進歩してしまつたので、その勢いを抑えるための力も同時に持ち合わせることで、科学の進歩するスピードを落とすべきだ。

エ 生活を豊かにするだけでなく、それが発展しすぎると滅亡につながる恐れがあるという、動物の牙や爪、毛皮に似た特徴を科学は持つているため、それに代わるものを一刻も早く探し出すべきだ。

問七 — 線5 「いまぼくたちに『学ぶことだ』とありますが、この「羽を休める力」について、「ぼく」はどのようなもの

だと考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 作業工程が複雑で集中力が要求される場合でも、無理をせず息抜きを優先し、大問題につながりかねない状態を防ぐことができる、今まで多くの人々が試行錯誤を積み重ねて生み出したもの。

イ どんなに忙しい状況においても、近道ではなくあえて遠くの回り道を選ぶことによって結果的に効率よく物事をやり遂げることができる、昔から言い伝えられてきた誰もが知っているもの。

ウ 多少手間のかかることが多くても、その困難に立ち向かって考えをめぐらせ、苦勞して克服することでかけがえないものを得ることができる、先人たちの経験によって積み上げられたもの。

エ 作業に追われて疲れ切ってしまった場合でも、代わりに作業を進めてくれて、しかも手際よく終わらせてくれることができる、働きすぎた人間に休息を与えてくれる便利で賞賛すべきもの。

問八 次の文章は、【文章Ⅰ】・【文章Ⅱ】全体を踏まえた上で、「ぼく」が述べようとしていることについて説明したものです。

X · Y にあてはまる言葉を三十字以上三十五字以内でそれぞれ答えなさい。

「みてた」にまつわる「母親」の言葉が生み出した物語は、幼少時の「ぼく」に

X
 ということを伝えた。

そのような古き良き時代を回想することによって、「ぼく」は

Y
 ということを述べようとしている。

【三】 次の文章は、重松清の小説『どんまい』の一節です。草野球チーム「ちぐさ台カープ」のメンバーである母の洋子と娘の香織の二人が公園の植え込みに隠れて、チームメイトの将大とプロ野球選手の吉岡が話している様子をうかがっている場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「教員採用試験、受かったんだ。^{注1}A採用だから、たぶん来年から教壇に立つと思う」

将大の言葉に、吉岡は「いいんじゃないか？」と軽く、冷やかに笑った。「おまえには似合うよ、そういうフツの人生が」

「……野球部の監督やりたいんだ」

「甲子園なんて遠いぜ、都立だと」

「いいよ」

素直にうなずいて、武蔵野学院の石井監督の顔と言葉を思い浮かべながらつぶつけた。

「勝ったり負けたりすることの大切さを、教えてやりたくてさ」¹

吉岡はさつき以上に冷やかに笑ったが、将大はかまわずつぶつけた。

「あと……野球のこと、もっと好きにならせてやりたい。好きだから野球部に入ってくるんだけど、もっともっと好きになってほしい」

まだ出会っていない教え子たちに向けた思いが半分、残り半分は吉岡に伝えたかった。わかってほしかった。会ってすぐに吉岡が言った「俺、やめるよ」²の言葉を、吉岡自身に取り消してもらいたかった。

だが、吉岡はキャップを取って髪を整え、またかぶり直して、「要するに自己満足の味を覚えさせるってことか」と言った。

「そうじゃないって。俺はさ……」

「いいいいよ、もう。好きだのなんだのって甘いこと言ってるやいいよ、それがシロートの特権だからな」

「プロだって同じじゃないのか」

「違うね、全然違う」

「だって、野球が好きだから、これでメシ食ってるんだろ？」

吉岡はあきれ顔でため息をついて、「俺がいちばん好きなのは、俺だよ」と言った。「で、俺が俺をいちばん好きになれるのは野球をしてるときの俺だった、それだけだ」

だから、もう——完治のめどがたたない重症の椎間板ヘルニアを患ったいまはもう、野球をつづける意味がなくなった。

「何年も二軍暮らししてまで現役にしがみついてもしょうがないだろ。そんなの俺じゃない、吉岡亮介じゃないんだ。四年半で七十勝近くしたんだから会社だって契約金のモトは取れてるし、俺が入団してから年間予約シートはずっと完売なんだぜ。もう十分貢献したんだ、ファンも楽しませてやったんだ」

「それでいいのか？ ヘルニアだって治るかもしれないんだろ？ おまえ、ここでやめて後悔しないのか？」

「ずるずる現役をつづけて、いい歳になって、結局治りませんでした、っていうほうが後悔するよ、俺は」

吉岡は将大に目をやって、「俺ら、まだ二十二だぜ」と言った。「いまなら第二の人生も間に合うだろう」
 なにも返せなかった。

「だめになった姿を見せないのも、ファンサービスのうちだ」

きつぱりと言って、「これで俺も伝説の名投手だな」と笑う吉岡から、将大はそつと目をそらし、唇を噛んでうつむいた。

ちよつとさー……。

ベンチの背後の植え込みの陰に身をひそめた香織は、隣の洋子を肘でつついて、息だけの声で言った。

シヨードアイさん、だめじゃん、負けてるよ。

そんなことないって。

だって、はつきり言って、吉岡さんの言ってることのほうが合ってると思うもん。男の引き際っていうか、カッコいいじゃん。

そんなことない。

なんで？

そんなことないの、とにかく。

洋子は折り曲げた膝を両手で抱え込んで、そんなことない、絶対に、と心の中で繰り返し返した。

腕時計に目をやる将大のしぐさに気づいた吉岡は、「まだなのか？」と少しいらだった声で言った。

「悪い……もうちょつとだけ」

約束の時間から五分過ぎていたが、啓一はまだ姿を見せない。びっくりさせて——なにかにつけて醒めて^さいる啓一に「感激」というものを味わわせてやりたくて、あえて「吉岡亮介と会えるんだぞ」とは言わなかった。それが失敗だったかもしれない。

陽が暮れ落ちてから、急に肌寒くなった。いつも自慢のポルシェで移動して、街を歩くことなどほとんどないという吉岡は、薄手の服装だった。肩や肘をいたわっている様子も、予想していたとおり、なかった。

「これ、よかつたら使うか？」

上着のポケットに入れておいた使い捨てカイロを差し出すと、「なんだよ、ショーダイ、冷え症になっちゃったのか」と笑われた。

違うよ、おまえのために持ってきたんだよ——と言っても、喜びはしないだろう。

「肩が冷えるとよくないから、使えよ」

「……いらねえよ、そんなの」

「腰も温めたほうがいいんじゃないのか」

「いらないうって言うてるだろ」

吉岡はうつつとしそうに顔の前で手を振って、「それにしても、天才に憧れるなんて、しょうがねえガキだな、そいつ」と苦笑

笑した。「ろくなおとなにならねえぞって言つといてやれ」

将大は黙ってうなずいた。吉岡とは別のことを考えていた。啓一ではなく、吉岡に、言わなければならない言葉がある。

「啓一に伝えとくよ」

「そうだよ、言つとけ、人間地道な努力が大事だぞ、センセイを見てみなさい、野球がへたでも立派なセンセイになりました、つてな」

「……天才でも、弱い奴になつちやだめだ、つて言うよ」

笑っていた吉岡の顔がこわばった。「なんだよ、それ」と声がとがる。「どういう意味だよ」と鋭い目で将大をにらむ。

将大は、今度は目をそらさなかった。黙って、じつと吉岡を見据えた。

「おまえに……俺の気持ちかわかるか」

うめくように言つて、先に目をそらしたのは、吉岡だった。

「ちよつと電話してみるよ」

将大は携帯電話を手にベンチから立ち上がった。

〔中略〕※問題作成の都合上、将大が吉岡から離れて啓一の家で電話をかけ、電話に出た啓一の父から家庭の事情で啓一が公園に行けなくなつたと知らされる場面を省略しました。

吉岡にキャンセルを謝らなくちゃな、と振り返ると——吉岡は立ち上がって、植え込みの前に立つ人影と向き合っていた。人影は、二人。

洋子と香織が、決まり悪そうにうなだれていた。

泡を食って駆け戻った将大に、吉岡は「おい、マジかよ」と嘲るように言った。「この二人、マジにおまえと一緒に草野球やってんのか？」

ショードイクン、ごめん、と洋子が上目づかいで詫びた。いやー、まいっちゃったなあ、と香織もうなだれたまま、ペロりと舌を出す。

「写真週刊誌に追われどおしだからな、そのへんの勘は鋭くなるんだよ」

将大がベンチを離れてすぐ、背後にひとの気配を察した、と吉岡は言った。「まさかこんな二人とは思わなかったけどな」と吐き捨てて、「おまえもすごいレベルの野球やってるんだな」と顎を上げて笑う。

「ショードイクンは関係ないから、こつちが勝手に隠れてただけなんだから」
憤然として言った香織を制して、洋子が覚悟を決めたように一歩前に出た。

「盗み聞きして悪かったけど……せつかくだから言わせて」

俺に？ と自分を指差す吉岡をキッと見つめて、「本気でこのまま引退するつもりなの？」と訊いた。「それでいいの？ あなたは」

「……関係ねえだろ」

「さつきショードイクンが言ってたように、あなた、あとで絶対に後悔するわよ」

「しねえよ。後悔したくねえから、やめるんだよ。聞いてただろ？」

洋子は「聞いてたわよ」と軽く返して、ふふつ、と笑った。「ガキだなあって思いながら聞いてた」
ちよつとやめなよお母さん、と腕を引く香織の手を払いのけて、さらにつづけた。

「どうせ引退するんなら、後悔しなさい」

「なんだよ、それ。後悔したくないって言ってんだろ」

「そうしないと、後悔しなかったこと、いつか、あんた後悔するから」⁴

「はあ？」

「後悔する勇氣もなかったこと、歳とっておとなになってから、絶対に後悔するよ」

「……わけわかんねえよ」

「おとなはみんな後悔しながら生きてんの！ 後悔することたくさんあって、もうどうにもならないこといっぱいあって、でも、人生やめるわけにはいかなから必死に生きてんの！ 後悔したくないとか、だめになったところファンに見せたくないとか、甘ったれたこと言ってるんじゃないわよ！」

洋子の剣幕に気おされて肩をすぼめ、ほんとそうだよなあ、と理屈よりも迫力で納得したのは——吉岡ではなく、将大のほうだった。

吉岡はうつとうしそうに舌打ちして、あらためて洋子を見下ろした。

「関係ねえって言っただろ。いいんだよ、ほつといてくれよ。俺が決めることだろ、誰にも文句言わせねえよ、あんたに文句つける権利なんてあるのかよ」

「ないわよ」

「だったらババアは黙ってるよ、誰にも文句言わせねえって言ってるだろ！」

声を荒らげる吉岡に洋子はひるみかけたが、グツと足を踏ん張った。

「わたしには、文句言う権利ないわよ」

「だろ？」

「でも……」

言葉に詰まった。一瞬、頭の中がからっぽになった。そこに——言葉が降ってきた。

5 「野球の神さまが怒る！」

考えて言ったわけではなかった。なにかを思いだして湧いてきたのでもない。

ショートバウンドの送球がグローブにきれいに収まったときのように。

ベースランニングで歩幅やスピードを調整することなく一塁ベースを回れたときのように。

フルスイングしたバットの真つ芯でボールをとらえたときのように。

それしかない言葉が、それしかないタイミングで、口について出てきたのだった。

すこん、と抜けたような沈黙を挟んで、吉岡の甲高い笑い声が響きわたった。

「よお、ショードイ、なんなんだよ、このおばちゃん……たまんねーよ、頭おかしいんじゃないの？」

片手で将大の肩を抱き、片手で腹を押さえて笑う。「草野球つてさ、こーゆー世界なのか？ なあ、おい」と声を裏返して笑いつづけ、思いもよらない洋子の言葉に啞然とする香織に、「おまえのカーちゃん、変わってるよなあ」と声をかける。

だが――。

吉岡は、決して洋子と目を合わせようとはしなかった。

「あのお母さん、なんかオーラみたいなのが全身から出てたよ」

あとになって、香織は言った。

「怖かったです……感動っていうより」

将大が打ち明けたのも、あとになってからだった。

〈中略〉

ひとしきり笑った吉岡は「あー、腹が痛え」とみぞおちをさすりながら、将大の肩に載せた手はずした。

「なあ、ショーダイ」

「……なんだ？」

「おまえさ、自分で自分が情けなくならねえか？ 大学じゃ通用しなかったけど、おまえだって甲子園組だぜ？ 俺の球を受けてたんだぜ？ それが、いまはこのざまかよ」

将大が顔をこわばらせても、むしろそれを待っていたように、せせら笑いながらつづける。

「草野球でもレベルつてもんがあるだろ、レベルが。なにがつかうて、こんな、オンナの入ってるようなチームで野球しなきゃいけないんだよ」

「ちよつと！」香織が血相を変えた。「なによ、その言い方！ 差別！」

だが、香織を振り向いた吉岡は悪びれた様子もなく、「野球をなめるな、つてこと」と言った。

「なめてるのはそっちでしょ——これは、洋子が言った。

吉岡は洋子とは目を合わさず、また将大に向き直った。

「ガキ、来ないんだったら、俺もう帰るわ」

「ああ……」

「まあ、おまえも元気でやれよ。世間の隅っこでさ、くつだんねえ連中とカスみたいな野球やってろよ。それが似合ってるんだよ、おまえには」

言い捨てて歩きだす吉岡を、香織は怒りに満ちた形相で追いかけてようとした。

だが、それより先に洋子が「待ちなさい！」と吉岡の背中に声をぶつけ、さらにそれより先に——将大が無言で吉岡の前に回

り込んで、胸ぐらをつかみあげた。

「なにするんだ！ てめえ！」

「謝れ！」

「なにがだよ！」

「二人に謝れ！ 俺たちに……謝れ！」

もみ合いになった。だが、プロの世界で鍛え抜いた吉岡の体はびくともせず、将大は逆に手首をつかまれてしまった。

「なにアツくなつてんだよ、バカ」

「野球を……野球を……」

つづく言葉は声にならなかつた。涙が目からあふれ、くそつ泣くなつ、と齒を食いしばつたら、吉岡に突き飛ばされた。

地面に尻餅をついて倒れこんだ将大を、吉岡はシャツの襟を整えながら、黙って見下ろした。将大も、もうなにも言わない。地面に後ろ手をつき、息をはずませて、真つ赤になった目で吉岡を見つめる。

吉岡は不意に身をかがめ、足元に手を伸ばした。もみ合いのはずみに将大の上着のポケットから落ちた使い捨てカイロを拾い上げ、ロージンバッグのように手のひらで軽くはずませて、襟元から服の中に入れた。右肩に載せて、上着ごと肩を何度か揉んで、「じゃあな」と笑う。

初めて、素直な笑い方になった。

将大も尻餅をついたまま、静かに言った。

「来週、試合があるんだ。俺たちの野球、一度見に来てくれ」

「……忙しいんだよ、俺だって」

吉岡はまた歩きだした。遠ざかる背中を、将大も、洋子も、香織も、黙って見送った。

やがてポルシェの重いエンジン音が響きわたる。長く尾を引くクラクションとともに、ポルシェは走り去っていった。

- 注1 A採用……教員採用試験に合格し、採用候補者名簿の上位に名前が記載されること。
- 注2 ロージンバッグ……ボールやバットが滑るのを防止するための粉末を布製の袋に詰めたもの。

問一 線 a ～ c の問題文における意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 決まり悪そうに

ア 相手に悪いことをしていたのを反省するように

イ たとえどんなことを言われても自分が悪いかのように

ウ 何を言われてもどうしてよいのか分かっていないように

エ 悪いことをしていたのが明らかになり恥ずかしそうに

b 泡を食って

ア 思いがけないことに驚きあわてて

イ 予想と異なっていたことに気が動転して

ウ 現実離れたことに不思議に思っ

エ 想像もつかないことに呆然として

c 憤然として

ア 耐えきれずに

イ あきれたように

ウ 怒ったように

エ 当然のように

問一——線1「吉岡はさつき以上に冷やかに笑った」とありますが、なぜですか。その理由として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野球に特化した指導はできない都立高校の野球部を、甲子園に出場させるという途方もない夢をいだいている将大にあきれたから。

イ 教員になり野球部の監督として、野球をとおして生徒の人間性を培うという目的をいんでいる将大を愚かしく感じているから。

ウ 将大が野球というスポーツの奥深さをろくに知らないにもかかわらず、一人前の監督になりたいなどと偉そうに言うことに、ばかげていると感じているから。

エ 自分の思いを満たすために学校の教員になり、野球部の指導をするということがあまりにも自己中心的な考え方であることに将大が気づいていないことがおかしかったから。

問三——線2「俺、やめるよ」とありますが、このように言う吉岡は野球をどのように考えていますか。このことが最もよく分かる部分を問題文中より三十字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問四

——線3 「天才でも、弱い奴になっちゃだめだ」という言葉にこめられた将大の吉岡に対する思いを説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たとえ困難に遭遇しても才能はあるのだからあきらめることなく、我慢して努力していけばその困難を克服できると前向きに考えてほしい。

イ いくら野球を続けられなくなったとしても、自分の才能を信じてくれ、その復活を応援してくれた者のことを悪く言うようなひねくれ者にはならないでほしい。

ウ たとえどんなに野球の才能があつたとしても、その才能を生かすための努力をしなくては何の結果も得られないことを分かってほしい。

エ どんな天才でも人間なのだから弱気になることもあるはずであり、人は皆その気持ちを乗り越えているのだから、自分に負けずに頑張つてほしい。

問五

——線4 「後悔しなかったこと、いつか、あんた後悔する」とありますが、これは洋子がどのような意味で述べたものですか。「後悔しなかったこと」の内容が分かるようにして、四十字以内で説明しなさい。

問六

——線5「野球の神さまが怒る！」とありますが、このように言う洋子の言葉について述べたものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 野球を出世のための道具としてしか考えていない吉岡の態度に洋子の野球への純粋な思いが、無意識のうちに表出した。

イ 吉岡の野球に対する考え方を改めさせるために洋子の考え抜いた末に発した言葉が、まさに洋子自身の思いを端的に言い表したものになった。

ウ 自分のプライドや周囲の反応にこだわってばかりいる吉岡の姿勢に対して、レベルの差はあるが野球に関わる洋子の熱い思いが自然と口をついた。

エ 野球という神聖なスポーツを、個人的な感情や思わくで利用する吉岡に、野球を愛する洋子の怒りが強く表れた。

問七

——線6「もみ合いのはずみに」「じゃあな」と笑う」とありますが、この時の吉岡についての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 将大たちの自分への思いや野球への情熱を今までは好意的にとらえられなかったが、次第にこの思いがゆらぎ、表面的には強がっているものの野球と前向きに関わるべく心が動いている。

イ 自分の思いとは相容れない将大の言動であったので、自分と比べて非力な将大に思わず強い力を出してしまったが、これをやり過ぎだと反省しつつ、自分の行いを軽い笑いでなんとかごまかそうとしている。

ウ 素人とは違うのだというプロ意識が強く残るものの、周囲の者たちの迫力にけおされて、しぶしぶ将大の言うことに従うしかないと言いつつ聞かせようとしている。

エ 思わず感情的になり、かつての野球仲間の手荒なことをしてしまったが、落ち着いて自分の行為を振り返り、関係を壊すべきではないという思いから、落ちた使い捨てカイロを拾いその場を取り繕おうとしている。

問八 この問題文の表現の特徴について述べたものとして適当なものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。解

答の順序は問いません。

ア 吉岡と将大の関係を具体的に説明するため、二人の過去の出来事が挿入されているが、これによって物語の時間が重層化したものになっている。

イ 会話表現であっても「」がつけられているものと「」がつけられていないものがあり、これによりどの登場人物が話した会話かが区別されている。

ウ 将大の会話の中で使われている「俺たちに……謝れ！」や「野球を……野球を……」で使用されている「……」によって、将大の感情の高ぶりが効果的に表現されている。

エ この問題文では常に将大の視点に寄り添いながら語られているため、将大の心情の変化や深まりが分かりやすくなっている。

オ 「声をぶつけ」「胸ぐらをつかみあげた」「息をはずませ」といった擬人法を問題文中で多用し、登場人物を生き生きと描いている。

カ 「シロート」や「センセイ」のカタカナでの表記には、相手を馬鹿にした気持ちが表れている。

問題はこのページで終了です。

